

「異名」について

—『下学集』の異名語彙をもとに—

萩原義雄

一 はじめに

本邦にあつて異名ということばは、いかなる基準で使用されているのであろうか。私たちは、共通対象のものや人物を示す時に、時代・地域・年齢層等によりその命名（ネーミング）が必ずしも同じ一つの呼称であるとは限らないことを理解できよう。現に、対象名称は、幾つにも呼ばれることを人々が余り好ましくないなどといった意識が働いていないことから領けることにちがいない。むしろ、逆に多様な名称を有する対象物・対象者に対して興味が注がれ、そのものがいかなる特徴・形態をもつていてこの多様なものの名付けかたが今日存在するのかその要因を知りたいのではなからうか。たしかに一つの対象物や対象者に二通り以上の呼称が存在し、その呼び名が同時代に交接することによって一方を頭目名称の語に据えて、ある一方をその頭目名称の語の異なった呼び名とすることになるのであろう。ここでは、これを従属名称の語と呼ぶことにする。この従属名称の語をそのまますぐに「異名」と位置付けて表現するののかということとはいえないのではなからうか。この「異名」ということばの基準値がそこにあつてしかりではないのかということである。これを上から支えるべき頭目名称の語にもなんらかの基準値がなければならぬであろうと考えるのである。この時の頭目名称の語の基準はといえ、日本語を中心としてとらえるのであれば、まず日本古来のことばである基

礎的和語がその比重を占め、次に和語に呼称がない語であれば、基礎的漢語がこれを担うことになる。そして、これに幾つかの従属名称の語が加味されてくる。この加味されてくる状況に従って、その語をどう表現するのかということにまず気を配らねばならない。というのは、その類似する内容を有する語が本当に同一視できるものなのか見極める必要性があるからにほかならない。すなわち、「類義語」と呼ばれることばの群がそれである。たしかに同じ性能をもっているのだが、何かが微妙に異なる場合、これを私たちは、「異名」の範疇としてとらえず、「類似する語」すなわち「類義語」としてその語をとらえるのである。たとえば、頭目名称の語が「盗人^{ぬすびと}」であれば、従属する語は、「山賊^{サンゾク}」「海賊^{カイゾク}」「夜討^{ヨウチ}」「強盗^{ゴウダウ}」などといった語になる。これを辞書編纂者は、「盗人」の類義語として見るのが普通ではなからうか。これを現代の国語辞書（『学研国語大辞典』）で確認してみると、以下の如きである。

ぬすびと 【盗人】他人の持ち物をかすめ取る者。泥棒。盜賊。類白波。偷盜。

サンゾク 【山賊】山中に根城を構え、通行人などをおそう盜賊。

カイゾク 【海賊】集団を作つて船をのりまわし、海上で他の船の積荷などをうばいとる盜賊。

ようち 【夜討】夜間、不意をついて金品をうばいとる盜賊。

ゴウトウ 【強盜】暴力や脅迫によつて他人の持ち物を奪うこと（人）類窃盜。

ここに示したことばの意味からも、山中に限定される盜賊すなわち「山賊」、海上に限定される盜賊すなわち「海賊」、夜間に限定される盜賊すなわち「夜討」、暴力脅迫行為を加味した盜賊すなわち「強盜」ということになり、盜賊

をある種の観点からとらえた名称であることに気づくのである。この限定内容から「盗人」の類義語ということになってくる。これに対し、「泥棒」「盗賊」「白波」「偷盜」はどうかであろうか。

どろぼう 【泥棒】 人のものをぬすみとる人。ものとり。ぬすつと。

トウゾク 【盗賊】 どろぼう。ぬすびと。特に、集団をなして大規模な盗みを働く者。

しらなみ 【白波】 どろぼう。盗賊。中国の白波谷にいた盗賊の名。

チュウトウ 【偷盜】 ぬすみ。ぬすびと。

これらは、「盗人」と同列に位置することばの群と言えよう。どのような点から、この名称が使われているのであるうかと考えてみるに、「盗賊」と「偷盜」は漢語名詞で、文語表現として使用される語であることも知れる。「白波」は中国後漢の盗賊の名が後世日本にも継承され、これを和訓読みとして広く「盗賊・盗人」の意味を表現する言葉として定着したものであり、中世日本の随筆・鴨長明の『方丈記』や公家日記『実隆公記』等の文献資料に散見する。古辞書では『埤囊鈔』巻第一・卅五に「盗人シラナミ白波ト云ハ何事ソ。後漢孝靈皇帝。中平元年張角ト云者黃天ト名ヲ揚テ黃ナル巾ヲ蒙ル者卅六万人ヲ相隨テ謀叛ヲ巧ムニ。皇甫崇ト云者是ヲ破リヌ。其餘黨共西河ノ白波谷ト云所ニ隱レ居テ諸國ヨリ上ル財寶ヲ掠取リケリ。時ノ人は是ヲ白波賊ト云。此ヨリ始テ盗人ヲ白波トハ云也。仍和語ニシラナミト云也。凡ッ白波ヲハ海賊ニ用ヒ、緑林ヲハ山賊ニ仕ト云共。」と当代のその使用状況を示している。また、『運歩色葉集』には「山賊シラナミ 異名白波」と見え、『埤囊鈔』のいうところの「白波」とは反対の「山賊」の異名として記述されている。最後に「泥棒」

は、江戸時代になって使用された最も新しい表現で、随筆・皇都午睡三・上に「東都にて泥坊と云は盜賊の異名にして京撰にて泥坊と云は放蕩者の異名とせり」と関東と関西とでこの言い回しの意味の異なりがあったことを示唆している。其角の『五元集』に「泥坊どろぼうや花の蔭かげにてふまれたり」という句が知られる。

「盜賊」として引合いになる語群（『広辞苑』第四版所収より抜粋）

愛護の若。網襦袢。異客。石川五衛門。大百日。和尚吉三。お嬢吉三。お坊吉三。買窩。怪盜。鍵・鑰。奸盜・姦盜。義賊。俠盜。巨魁・渠魁。巨賊。熊坂心。群盜。窩主買。胡椒頭巾。五人組。護摩の灰。西面の武士。さんしょ。殘盜。山門。三文オペラ。七福神盜賊。実悪。忍び返し。島衛月白浪。下都・僕。酒吞童子・酒顛童子。白浪物。ずき。透波。素つ破。草賊。賊地。賊名。陳基。亭長。盜跖。盜賊鷗。土蔵破り。女賊。抜き。鼠小僧。蜂須賀小六。八幡人。匪賊。火付盜賊改。百日鬘。船打込橋間白浪。緑の林。娘。娘師。目明し。紅葉狩。用心棒。夜討ち。夜盜。梁山泊。梁上の君子。緑林。童盜人。へ*網かけ文字は、防ぐ側になつことばの称

以上、このように見てみた時、「盜賊」や「盜人」の意味と同列の位置に置かれることばの群であることとなるわけだが、これを辞書編纂や文章仕立ての過程でどう記述するかが焦点となる。

そこで、これを室町時代の代表的辞書である『下学集』を指針に据えて考察してみることにはしたい。そして、連関性の古辞書なども併せて考察を試みることにする。

二 「異名」が生まれる背景

一つの閉ざされた社会グループによる限られた相互理解にもとづく別呼称を意識して使用する場合は、特殊性を持た

せた隠語や忌詞として異なった呼称のことばが生産される。古くは宮廷女房ことばである「おかべ（豆腐）」・「むらさき（醤油・鯛）」がそれであり、江戸時代の廓ことばである「突出し（初店である遊女。禿立ちしない遊女）」、また武者ことばである「転進」（退却の意）・「羊質虎皮（外に虎の勢を成て内に羊の心あるを武士の恥辱とすへ塙囊鈔巻第八29）」などがある。現代では若者ことばや学生ことばなどがこれに繋がる。これは負のレベルへの傾斜を余儀なくされることばの群である。というのは、一般社会に通用することばを意識して避けることで、同じレベルの同じ領域の人々が生活活動できることを主なる目的に据えたことばであるからにはかならない。「異称」の語という。

これとは反対に次に考えられるのは、ことばの品格という観点から日常生活でふだん使用する呼称以外に、晴の場などにふさわしい改まった呼称を用いる場合のことばの群がある。これは正のレベルに位置し、使用は改まった行事である祝賀葬送祭礼などの席で使用することばとして限定されはするが、広く一般に理解されるべき要素を有しているからにはかならない。古来本邦にあつて大陸文化に対する西域志向が最大重要視され、中国名称語彙（唐名）をもって中央の政治・文化・宗教などといったあらゆる分野に浸透してきた。ただ、正のレベルへの志向はあるのだが、こうした祝賀葬送祭礼の年中行事の場や時に極めて少ない関係者に限定された状況のなかで指向されていて、これが全ての人々に理解され、これをすらすらと流暢に人々が使用するにはいたっていないのも現実であろう。そこで、必要な状況場面に応じた留め書きがなされ、こんな場面、こんな状況に遭遇したらどう対応するかそのことばの群が編まれることになってくるのである。いわゆる雅語・詩歌語・文章語などと呼称されることばの一群がそれである。歌学書である藤原為家『八雲口傳』の「題を能々心得とくべき事」（日本歌學体系第三卷・三九一頁）に、「ことに名譽ある題どもを、わざと異名をもとめて、しかをすがるとよみ、草をさいたづまとよみ、萩を鹿鳴草とよまむ事、其詮なし。螢を夏蟲と詠ずる

はうちまかせたる事なれど、それも後撰に、八重むぐらしげれる宿は夏むしのごゑよりほかにとふ人もなし 此歌は蟬ときこえたり。されど、夜半の夏蟲ともよみ、思にもゆるなどよむ也。「たゞほたるとよむべきにこそ。」牡丹ふかみ草紫苑鬼のこし草 蘭ふちばかま か様のこゑのよみ物は、異名ならではかなふべからず。歌にも聲のよみあまたあり。」と示唆する内容が盛り込まれている。

さらに、ことばの多様化の切り出しによる場合にも「異名」は生じてくるのではなからうか。一つのものや人物の有する特徴をいくつかに細分化し、その成長度合いや変化に対応してそれぞれの個々の特徴を強調して表現することがある。この強調された部分だけを切り出し、その特徴のある部位に新たな個別名称を添えることばの育み方である。たとえば、人物で表現するならば、一人の人間をさまざまな観点から見据えてこれを呼称する。『下学集』の異名を注記するなかで、人名門の筆頭にある「聖徳太子」がそうである(他古辞書『運歩色葉集』にも見える)。そして、聖徳太子には、六つの異名があり、一は出生場所である既戸からとった「既戸太子」、二は居住場所である南宮上殿からとった「上宮太子」、三は八人同時に奏上する事を一時に判断する才能からとった「八耳太子」、四と五は三と同じ才能からとった「豊聡太子」「耳聡太子」、六として気質が睿明仁恕であることからとった「聖徳太子」といった名前がそれである。

また、物で表現するのであれば、酒や茶などの飲物、筆や硯そして墨、紙などといった文具を産地や品質などで区別し命名する。これも『下学集』の飲食門や器財門に記載されている。一つのものでも産地が違えば品質も異なるし、同じものでも精製方法が異なればそのものが同じ一つのものでも違うものへと変化する。良品、悪品とを区別することにもなる。これがいわばことばの多様化の切り出しとなるのである。このことばの多様化の切り出しがどの程度の状況で生じるのかは当代に生きる人々のその対象への熱い眼差しがあつたのことかと思わないではない。それをいかに重要

視しているかにおいて必定の名称がなされていくことになる。

三 『下学集』における異名語彙

『下学集』の編纂過程で、「異名」と記載された語は次の如くである。この異名と記載された語彙については『下学集』古写本のなかでも改編作業が一步進んだ形態にある慶長十五年写の春良本『下学集』（宮内庁書陵部蔵。見出し語数三六六七語）と増補改編が定型化した形態を有する元和三年版『下学集』（見出し語数三〇五〇語）とを対校してみること、原形『下学集』からこの二種類の『下学集』への編纂変更過程を明確に認定することができるのではないかと考える立場にある。そのなかで「異名」という記載に着目して今回検討して見たのである。

この作業を進めていくうえで、コンピュータによるテキストデータ検索が何よりも有効であることをまずここに記しておきたい。筆者は、元和三年版『下学集』本文テキストデータ（自家作成）をもとにこの作業を開始してまず元和三年版から七十五件の「異名」語彙を確認することができた。これを基礎データとして次に春良本（テキストデータは未完成）と対校していく作業を試みたのである。

部門	漢字	元和三年版注文語彙	頁行数	春良本注文語彙	頁行数
時節	春 <small>ハル</small>	異名 青帝 <small>セイテイ</small> 東君 青陽 <small>セイヤウ</small> 麗景 <small>レイケイ</small>	27 ②	「青帝。東君。青陽。麗景」	15 ④
時節	夏 <small>ナツ</small>	異名 朱明 <small>シュメイ</small> 三伏 <small>サンフク</small>	27 ②	「朱明。三伏」	15 ④

部門	時節	時節	時節	官位	人名
漢字	秋 ^{アキ}	冬 ^{フユ}	柘 ^{シヤ}	儀同三司 ^{ギドウサンシ}	聖德太子 ^{シヤウトクタイシ}
元和三年版注文語彙	異名 白藏 ^{ハクザウ} 商天 ^{シヤウテン}	異名 極時 ^{コクシ}	日ノ之異名	三司 ^シ ハ者指ス上ノ三大臣 ^{ミチタカ} ヲ也 中ノ関白 ^{イシウコウ} 道隆 ^{ミチタカ} ノ之ニ男伊周公 ^{イシウコウ} 大納言 ^{ダイナゴン} ノ時遭 ^{トシゾウ} ラレ左遷 ^{サセン} セ 飯洛 ^{イハラク} ノ之後賜 ^{タマ} フ儀同三司 ^{ギドウサンシ} ノ之官 ^シ ヲ此ノ官 ^シ ハ始 ^{ハジメ} ル於伊周公 ^{イシウコウ} ヨリ矣 三大臣 ^{ミチタカ} ノ異名 ^{イヘナ} ハ丞 ^{シヨウ} 相 ^{ソウ} 蓮府 ^{レンフ} 槐門 ^{クワイモン} 大相國 ^{ダイソウコク}	用明天皇 ^{ヨウメイ} 第一御子 ^{ダイイチミコ} 本地救世觀世音 ^{キョウセクワンセオン} 也 前生 ^{ゼンシヤ} ハ在 ^テ テハ支那 ^{シナ} ニ則南岳 ^{ナンガク} ノ之惠思禪 ^{ヱシセン} 師也 因 ^{ユヘ} ニ達磨 ^{タルマ} ノ指南 ^{シヤウバン} ニ出 ^デ シ生 ^{ナマ} シテ于日 ^{ニヒ} 本 ^ホ ニ号 ^{コウ} ニ聖德太子 ^{シヤウトクタイ} ト有 ^ア リ六 ^{ロク} ノ異名 ^{イヘナ} ニ生 ^{ナマ} ル于既 ^{キマヤト} ノ戸 ^ド ニ故 ^{コト} ニ曰 ^{イハ} ク既 ^{キマヤト} ノ戸 ^ド ニ太子 ^{タイシ} ト用 ^{ヨウ} 明愛敬 ^{メイアイキョウ} シテ居 ^イ シム南宮 ^{ナンキウ} ノ上殿 ^{ジョウテン} ニ故 ^{コト} ニ曰 ^{イハ} ク
頁行数	27 ②	27 ②	34 ②	41 ⑦	45 ⑦
春良本注文語彙	「白藏 ^{ハクザウ} 。商天 ^{シヤウテン} 」	「玄英 ^{ケンエイ} 。極時 ^{コクシ} 」	未記載	「三司 ^{サンシ} 者上之三大臣 ^{ミチタカ} ヲ指ス也。中 ^{ナカ} 比 ^ヒ 関白 ^{クワンパク} 道隆 ^{ミチタカ} 之ニ男伊周公 ^{イシウコウ} 之公 ^{ノキミ} 。大納言 ^{ダイナゴン} ノ時 ^{トキ} 。左遷 ^{サセン} 被 ^セ 。飯洛 ^{イハラク} 之後 ^{ノチ} 。言 ^{コト} ノ時 ^{トキ} 。左遷 ^{サセン} 被 ^セ 。飯洛 ^{イハラク} 之後 ^{ノチ} 。——之官 ^{ノシ} ヲ賜 ^{タマ} フ。此官 ^{ノシ} 者伊周公 ^{イシウコウ} 於 ^オ ヨリ始 ^{ハジ} 也。三大臣 ^{ミチタカ} 之唐名 ^{テイメイ} 。丞 ^{シヨウ} 相 ^{ソウ} 。蓮府 ^{レンフ} 。槐門 ^{クワイモン} 大相國 ^{ダイソウコク} 」	「人王卅 ^{ヨウメイ} 二代用明天皇 ^{ヨウメイ} 第一之御子 ^{ダイイチミコ} 本地救世觀世音 ^{キョウセクワンセオン} 之化身 ^{ノケガタ} 也。前生 ^{ゼンシヤ} 者支那 ^{シナ} ニ在 ^テ ス。則南岳 ^{ナンガク} ノ之惠思禪 ^{ヱシセン} 師也。達磨 ^{タルマ} ノ指南 ^{シヤウバン} ニ因 ^{ユヘ} 。日本 ^{ニッポン} 于出生 ^{ニシヤウ} 。——ト号 ^{コウ} 。六 ^{ロク} 之異名 ^{イヘナ} 有 ^ア 也。既 ^{キマヤト} ノ戸 ^ド ニ生 ^{ナマ} ル故 ^{コト} ニ既 ^{キマヤト} ノ戸 ^ド ニ太子 ^{タイシ} ト曰 ^{イハ} ク。用明愛敬 ^{メイアイキョウ} 而 ^{シテ} 。南宮 ^{ナンキウ}
頁行数	15 ④	15 ④		30 ⑤	30 ⑤

氣形	氣形	氣形	氣形	氣形	
桃林 <small>タクリン</small>	果下 <small>クワカ</small>	追風 <small>ツイカセ</small> ツイフウ	龍蹄 <small>テイ</small>	山梁 <small>サンリョウ</small>	
野 <small>ニ</small> 牛ノ異名也 尚書ニ云ク放 <small>ハナ</small> ニ牛ヲ桃林ノ	童 <small>ホタケ</small> 羈 <small>シム</small> ニ我カ果下ノ驩 <small>リ</small> ニ云々	逸馬ノ異名	逸馬ノ異名ナリ也	雉ノ異名ナリ也 見ニクニ論語ニ也	上宮太子ト八人同時ニ奏 <small>ス</small> レ事 <small>ヲ</small> 一時ニ善ク聽 <small>ク</small> 故ニ曰フ八耳太子ト 又曰ニ豐聰ト 又曰ニ耳聰ト 睿明仁恕 <small>エイ</small> ニ故ニ曰フ聖德太子ト也 誅 <small>チ</small> ニテ守屋 <small>モリヤ</small> ヲ而始 <small>テ</small> 建 <small>コソ</small> ニ立 <small>リ</small> ス 佛法ノ洪基 <small>コウキ</small> ト
62 ③	62 ②	62 ①	61 ⑦	59 ⑦	
「牛之異名也。尚書云。牛於——之野ニ放」	「小馬之異名也。其ノ長 <small>ダケ</small> 三尺。之ニ乗テハ果子低枝之下ヲ過 <small>キツ</small> 可也。故ト曰。荆公カ句ニ云。童呼テ我——驩 <small>リ</small> 羈 <small>ス</small> ニ云」	〔ツイフウ〕	「逸馬之異名也」	未記載	上殿ニ居スル故ニ上宮太子共モ曰。八人同時事ヲ奏ス。同ク一時ニ善ク聽クマウ故ニ八耳ノ太子ト曰。又ハ豐聰太子。又耳聰太子共モ曰。睿明仁恕也。故聖德太子ト曰。守屋ヲ誅テ而始シテ而佛法洪基ヲ建立シ給フ。聖賢也」。
52 ③	52 ②	52 ①	52 ①		

部門	漢字	元和三年版注文語彙	頁行数	春良本注文語彙	頁行数
氣形	蚘虫栗 <small>ケンリツ</small>	子牛ノ異名也 言其ノ牛ノ角如 <small>二</small> 蚘虫栗 <small>一</small>	62 ④	「チンリツ」と添読。「小牛之異名也。詞 <small>云心</small> ハ其ノ角――如也」	52 ④
氣形	黒牡丹 <small>コクホタン</small>	牛ノ異名也 唐人劉訓京師ニ春遊スルニ觀ニ牡丹ヲ訓後ニ迎ヘテ客ヲ賞ス花ヲ繫ニ水牛ヲ在レテ前ニ指シテ曰ク此劉訓カ之黒牡丹也	62 ④	「牛之異名也。唐人劉訓京師ニ春遊牡丹ヲ觀ル。訓後ニ客ヲ迎テ花ヲ賞ス也。乃チ水牛ヲ繫イテ前ニ在リ。指シテ曰ク此則劉訓カ之――ト曰フ故事也」	52 ④
氣形	蟹 <small>カニ</small>	異名招潮	65 ⑤	「異名 <small>セウテウ</small> ヲ招潮ト曰也」	55 ①
氣形	虱 <small>シラミ</small>	食レ人ヲ虫 異名ヲ半風トイフ 句ニ云ク窓前ニ捏 <small>ヒネ</small> ル半風 <small>一</small>	67 ②	「古句」に作る。「人ヲ食虫也。異名ヲ半風ト曰フ也。古句云ク月隱窓前ニ半風ヲ捏 <small>ヒネ</small> ル」	55 ⑤
飲食	歡佰 <small>クワンハク</small>	酒ノ異名也云	101 ①	「酒之異名也」	91 ③
飲食	青州從事 <small>セイシユウ</small>	酒異名ナリ也 徹 <small>テツ</small> スル臍 <small>ホソ</small> ニ義也 從事ハ官ノ名也	101 ①	酒之名也。酒之臍 <small>ホソ</small> ニ徹 <small>テツ</small> スル也。青州者 罇之名也。名酒之出所也ト云」	91 ④

器財	飲食	飲食	飲食	飲食	飲食	飲食	飲食
孔方兄 コウハウヒン	北焙 ホクバイ	官焙 クワンバイ	建溪 ケンケイ	鷹爪 ヨウサウ	掃愁帚 サウシウシウ ハラウウレイヲハウキ	釣詩鈞 ツルシヲツリバリ	忘憂物 バウイウフツ
兄ノ尊敬ノ義 錢ノ異名也 孔ハ穴也 錢ノ穴四方也	茶ノ異名也		茶ノ異名也	好茶ノ之異名ナリ也	二ツ共ニ酒ノ異名也		酒ノ異名ナリ也 飲トキハ酒ヲ則チ忘レル憂イラ
104 ③	101 ⑥	101 ⑥	101 ⑥	101 ⑤	101 ④	101 ④	101 ④
「錢之異名也。孔者穴四方也。兄者尊敬之義也」	「二ツ共ニ茶ノ異名也」		「茶之異名。茶之出所名処也」	「好キ茶之異名也」	「ウレイヲハラウハハキ」 「上与同義」	「酒之事ヲ指テ云」	未記載
94 ⑦	92 ③	92 ②	92 ②	92 ②	92 ①	91 ⑦	

「異名」について—『下学集』の異名語彙をもとに—(萩原)

部門	漢字	元和三年版注文語彙	頁行数	春良本注文語彙	頁行数
器財	青蚨 ^{セイフ}	錢ノ異名也。言ハ此ノ虫能ク生ニス多子ヲ世俗取ニテ此ノ血ヲ以テ塗ル錢ニトキ其ノ錢多ク生レ生子ヲ故ニ呼レテ錢ヲ祝シテ而云フ青蚨ト也。嗚呼世俗ノ人耽ニルコト錢財ニ何ソ其レ至ニラン于茲ニ哉ヤ子母錢亦タ此ノ義也	104 ④	「錢之異名也。言ハ此虫能ク多子ヲ生ス。世俗之者此ノ血ヲ取テ以テ錢ニ塗ル。則シテ其ノ錢多子ヲ生ズ。故ニ錢ヲ呼シテ祝而——ト曰也。嗚呼世人是レ程ト錢財ニ耽ル。何其ソ茲ニ于至ル哉。子母錢モ亦此ノ義也」	95 ①
器財	用途 ^{ヨウト}		104 ⑥	注文ナシ	95 ③
器財	用脚 ^{ヨウキョク}		104 ⑥	注文ナシ	95 ③
器財	青銅 ^{セイドウ}		104 ⑥	未記載	95 ③
器財	青鳧 ^{セイフ}	以上皆ナ錢ノ異名也	104 ⑥	「二共ニ錢之異名也」	95 ③
器財	軍持 ^{グンシ}	花瓶ノ異名	105 ⑥	「花瓶ノ異名」	96 ④
器財	金鴨 ^{キンアツ}		105 ⑥	〔キンカウ〕	96 ⑤

器財	睡鴨 スイアブ	二共ニ香炉ノ之異名也	105 ⑥	〔スイワウ〕 「二共ニ香炉之異名也」	96 ⑤
器財	焦尾 セウビ	琴ノ異名也 亦曰ニ焦桐ト 後漢ノ蔡邑取テ竈下ノ爆桐ヲ以テ造ル琴ヲ殊ニ音絶ス比ヒラ矣 其ノ桐尾尚焦ル故ニ呼レテ琴ヲ云フ焦尾ト亦云フ焦桐ト也 亦桐君トモ云フ也	111 ④	「琴之異名也。亦焦桐ト曰フ。後漢之代ニ蔡邑竈下之爆桐ヲ取リ以テ琴ヲ造。殊音ニ勝妙ニシテ比ヒラ絶矣。其ノ桐尾尚焦ル故ニ琴ヲ呼ンテト曰。亦焦桐トモ云フ。或ハ桐君共ニ曰者也」	103 ③
器財	笛 フエ	異名也 云フ横玉ト 然ルニ古句ニ横玉叫レ雲天似レ水ニ 風俗通ニ曰ク武帝ノ時丘仲所レ作ル也	111 ⑥	「馬融始而之ヲ作ル。竜之吟声ヲ聞テ以テ之ヲ摸ス也。異名横玉ト云。古句ニ云、横玉雲ニ叫ンテ天水ニ似リ。云々」	103 ⑦
器財	華鯨 クワケイ	鐘ノ異名也	112 ③	「鐘之異名」	104 ④
器財	龍頭 リョウドウ 鷓首 ゲキ 首 シユ	共ニ船ノ之異名ナリ也 又ハ云フハ龍頭ト 鷓首ト也 懸鐘カネ 処也 或ハ云フ竜首ト也 鷓首ハ水鳥ナリ也 船ノ頭ニ畫ク其ノ形者ハ欲スル船ヲ不ト溺ニ波浪ニ也	117 ⑤	「龍頭」「鷓首」に区分。「之依ニ船ヲ鷓首ト曰フ也。愚ヲ謂ク此ノ鳥水ヲ得ル如ク船波浪ニ溺〔タタヨフ〕不欲也。之ニ依テ祝而——云歟」	112 ①

「異名」について―『下学集』の異名語彙をもとに―(萩原)

部門	漢字	元和三年版注文語彙	頁行数	春良本注文語彙	頁行数
器財	龍淵 リョウエン		120 ⑤	未記載	115 ①
器財	馬蹄 バテイ		120 ⑤	「以上四、硯之異名也」	115 ①
器財	陶泓 タウフウ		120 ⑤	注文ナシ	115 ①
器財	鄴瓦 ケウカ		120 ⑤	注文ナシ	114 ⑦
器財	魚網 キョマウ	以上ノ三者紙ノ異名ナリ也	120 ④	〔ギョマウ〕「以上三者紙ノ異名也」	114 ⑦
器財	白麻 ハクマ		120 ④	注文ナシ	114 ⑦
器財	白楮 ハクチヨ		120 ④	注文ナシ	114 ⑦
器財	後素 ゴソ	繪ノ異名也 見ニリ論語ニ也	119 ③	「繪ノ異名。魯論ニ見タリ也」	113 ⑦
器財	泛宅 ハンタク	共ニ船ノ之異ナリ也	117 ⑦	「二ツ共ニ船之異名」	112 ②
器財	浮家 フカ		117 ⑦	注文ナシ	112 ②

器財	器財	器財	器財	器財	器財	器財	器財	器財	器財
鼠尾 ソビ	黒頭公 コウトウコウ	中書君 チュウショクン	管城子 クワンシヤウ	毛錐子 モウスイシ	兔毫 トウガウ	毛穎 モウエイ	石卿候 セキケイコウ	鳳味 ホウミ	陳玄 チンゲン
							以上ノ七ハ者硯ノ異名ナリ也		
120 ⑦	120 ⑦	120 ⑦	120 ⑦	120 ⑦	120 ⑦	120 ⑦	120 ⑤	120 ⑤	120 ⑤
未記載	「以上五者筆異名也」	未記載	注文ナシ	未記載	注文ナシ	注文ナシ	未記載	未記載	未記載
115 ②	115 ②	115 ①	115 ①	115 ①	115 ①	115 ①	115 ①	115 ①	115 ①

部門	漢字	元和三年版注文語彙	頁行数	春良本注文語彙	頁行数
器財	鼠鬚 ソシユ	已上ノ八ハ者筆ノ異名ナリ也	120 ⑦	注文ナシ	115 ②
器財	麝煤 ジヤバイ		122 ②	注文ナシ	115 ②
器財	油煙 ユエン		122 ②	「以上此四者墨之異名也」	115 ③
器財	松煙 セウエン		122 ②	未記載	115 ③
器財	玄雲 ゲンウン	以上ノ四ハ者墨ノ異名ナリ也	122 ②	未記載	115 ③
草木	芍薬 シヤクヤク	異名ハ将離花 又云フ可離花ト 唐ノ李群玉カ句ニ云ク芍薬花開ク菩薩ノ面与ニ下ノ櫻欄一対ノ句也	123 ②	「異名将離花。又可離花ト云フ。李群玉ガ詩ニ曰ク——花開ク菩薩ノ面。櫻欄葉散シス。夜叉ノ頭ヲト云也」	117 ②
草木	砥草 トクサ	異名ハ木賊	126 ②	「異名曰木賊也」	120 ③
草木	甘草 カンザウ	異名ヲ云フ國老ト 言ハ若シ薬与レ薬投合スルニ相敵シテ成レ毒ヲ時以テ甘草ヲ加レラレ之ヲ則ハハ兩薬和合シテ成レ害ヲ 故ニ	127 ①	「國老」を見出しとする。「甘草ノ異名也。言ハ若シ薬ト薬与ト投合スル時キ禁忌相敵有ツ而テ毒ト成ル時キ甘草ヲ以テ之	121 ③

草木	草木	草木	草木	草木	草木	
犬鼻 ケンビ	清客 セイカク	東門 トウモン	青門 セイモン	蜜筒 ミツトウ	白芥子 ヒヤクケン	
惡柿ノ異名ナリ也	梅ノ異名ナリ也	共ニ瓜ノ異名ナリ也 秦ノ東陵侯種ニ瓜ヲ 長安城ノ東ニ 瓜有テ五色一甚タ美ナリ 謂フ之ヲ青門ノ瓜東門ノ瓜ト也		甘瓜ノ異名ナリ也	異名ニ云フ米囊ト也 其ノ實如シ細キ米ノ 也	一切ノ藥ニ必ス加フワル甘草一也 然ルニ若 シ兩國相敵シテ成レズ害ヲ時ハ有ニリ國老一 來テ而弁理非一和ニ睦スル之ヲ則ハ不レ成 レ害ヲ也 故ニ以レテ之ヲ爲レズ喻ヘテ詳ニ見タリ 本草ニ
132 ①	131 ⑤	129 ①	129 ①	129 ①	128 ③	
「惡キ柿之異名」	「梅花ノ異名也云」	「二ツ共ニ瓜之異名也。秦之東陵侯 瓜於長安城之東ニ種、即チ五色有リ。 甚タ美ナリ。之ヲ東門之瓜リ、西門之瓜 リト謂フ。此レ自リ始テ爾云也」	注文ナシ	「甘瓜之異名也」	「ヒヤツケシ」異名米囊花曰。其 實細粟如也」	ニ加レハ則チ兩藥和合シテ害ヲ成サ不。故ニ 一切之藥ニ必ス甘草ヲ加フ也。之國ト國 与ト相敵シテ害ヲ成ス時キ國老有。出テテ 之和睦ノスルヲ則シハ害セ不而シテ國ヲ調 諭フ也。此ノ旨本草ニ見タリ曰也」
127 ⑦	127 ④	123 ⑥	123 ⑤	123 ⑤	122 ④	

部門	漢字	元和三年版注文語彙	頁行数	春良本注文語彙	頁行数
草木	木練 <small>コネリ</small>		132 ②	注文ナシ	127 ⑦
草木	木淡 <small>キヤワシ</small>	以上二共ニ柿ノ之異名 <small>ナリ</small> 也	132 ②	「二ツ共ニ柿之異名。渋カラ不。柿キ日本ニ之ヲ曰フ」	127 ⑦
草木	銀杏 <small>イチヤク</small> ギンキヤウ	異名ハ鴨脚 <small>アフキヤク</small> 葉ノ形如ニ鴨脚 <small>カモノアシ</small> ノ故ニ 山谷カ句ニ云ク風林收ニ鴨脚 <small>ラ</small> 也	132 ④	「異名ヲ鴨脚ト曰フ。葉ノ形チ鴨脚ノ如シ。故ニルカ云。山谷カ句ニ曰ク風林鴨脚ヲ収ム」	128 ③

ここで時節門における「春」「夏」「秋」「冬」の語彙が春良本では「異名」と記載されていないこと。官位門の「儀同三司」の注文語彙「三大臣ノ異名」(元和三年版の他に筑波大学本・春林本・前田本・榊原本・静嘉堂本甲乙・亀田本・文明十一年本・天文二十三年本・永禄二年本・黒川本も同じ)が春良本では「三大臣之唐名」とあること。飲食門の「青州従事」注文語彙「酒異名也」が春良本では「酒之名也」とあることが異なりの部分である。このことは、ただ「一之名也」と記載表記する語と「一之異名也」と記載表記する語との編者と改編者とはその判別意識に相違があることを示唆している。単に記載の上でのミスでないことも窺われるのではなからうか。このことは、改編の著しい春良本でどの程度あるのか次に揭示しておく。

時節	時節	時節	時節	時節	天地	部門
林鐘 リンショウ	蕤賓 ズイヒン	仲呂 チュウロ	上巳 ジョウジ	花朝 クワチウ	居諸 キショ	見出し語
六月	五月	四月	初メ作三月三日ノ之遊ヲ 時日適 當ル上巳ニ 故ニ至テ今呼テ此ノ時 ヲ云フ上巳ト也	二月也 朝朝花ヲ待ツ故ニ花朝云	日ハ居月ハ諸也 畧シテ日月ヲ指シ テ居諸ト曰也	元和三年版注文語彙
29 ④	29 ②	28 ⑦	28 ⑦	28 ④	17 ⑤	頁行数
〔リンセウ〕「六月異名也」	〔スイヒン〕「五月之異名也」	「四月之異名也」	「三月異名也。又金谷園記ニ曰。昔 鄭虞云者三月之上ノ辰ニ二女産。又 上ノ巳ニ一女産ム。兩日之間ニ三女 ヲ産。其皆死ニ矣ヌ。此時土俗皆大 忌ト成。之依此日尊卑皆東流之水ニ 向禊祓ヲ為。晋國之風俗也。初而三 月三日之遊ヲ作。時日三月三日之上 巳當云也」	「二月之異名也。朝々花待ト云」	「日居・月諸也。日月之異名。略シ テ而日月ヲ指テ居諸ト曰フ儀也」	春良本注文語彙
18 ③	17 ②	16 ⑦	16 ④	16 ③	9 ④	頁行数

「異名」について—『下学集』の異名語彙をもとに—(萩原)

「異名」について『下学集』の異名語彙をもとに（萩原）

部門	時節	時節	時節	時節	時節	時節	時節	時節	時節
見出し語	夷則 <small>イソク</small>	南呂 <small>ナンロ</small>	無射 <small>フエキ</small>	應鐘 <small>オウシヨウ</small>	黄鐘 <small>ワウセウ</small>	大呂 <small>タイロ</small>	麝香 <small>ジャカウ</small>	黄耳 <small>ワウニ</small>	
元和三年版注文語彙	七月	八月也 <small>オウ</small> 又云ク葉月 <small>ハツキ</small> 落葉ノ時節故ニ云フ也	九月	十月	十一月	十二月	香獸也 或ハ小鳥ノ名也 杜子美カ句ニ麝香石竹ニ眠ル	晋陸機ノ之犬ヲ黄耳ト名 此ノ犬常ニ書ノ使ヲ爲也 <small>ナス</small>	
頁行数	29 ⑤	30 ②	30 ②	30 ④	30 ⑤	30 ⑥	62 ⑥	63 ③	
春良本注文語彙	「七月ノ異名也」	「ナンリヨ」「八月之異名也」	「フシヤ」「九月之異名也」	「ヲウシヤウ」「十月ノ異名也」	「ワウセウ」「十一月異名也」	「タイリヨ」「十二月之異名也」	「——者香獸也。或ハ小鳥之異名也」	「クワウシ」「俊犬之異名也。晋之陸機之犬——ト名。此犬常ニ書ノ使者ヲ為スル也」	
頁行数	18 ⑤	19 ①	19 ②	19 ⑦	20 ②	20 ④	52 ⑥	53 ⑤	

器財	器財	飲食	飲食	飲食	飲食	飲食	飲食	飲食
庖丁 ハウチヤウ	白水真人 ハクスイノシンニン	吹簾 ソリ	芳茗 ハウメイ	浮蟻 フギ	芥柴 ハウサイ	濁醪 ダクラウ	緑醕 リョクシヨ	
刀ノ名也 又ハ屠兎ノ之名也 詳ニ				酒ノ名也 酒ノ糟點シテ蟻ニ泛フ 盃ニ浮蟻ノ如シ 故ニ尔云フ	濁醪也 一醉シテ而即チ醒芥柴ヲ火 焼テ便 滅スルカ如シ 故ニ柴酒ト 云フ也		酒也	
106 ⑦		101 ⑥	101 ⑥	101 ⑤	101 ③	101 ③	101 ②	
「刀之異名。又屠兎之名也。此ノ故	「錢之異名」	「悪キ茶也。異名也」	「好茶ノ異名」	「悪酒之異名也。酒之糟點シ而テ盃 ニ泛ブ。浮蟻（アリ）ノ如シ。故ニ 尔云者也」	「濁酒之異名也。一醉而シテ即醒ル 事——ヲ焼ガ如シ。々々者火早ク滅 ル故ニ悪酒ヲ名テ——酒ト曰フ」	「悪酒之異名也」	「好酒之異名也」	
97 ④	94 ⑥	92 ③	92 ③	92 ①	91 ⑦	91 ⑥	91 ④	

部門	見出し語	元和三年版注文語彙	頁行数	春良本注文語彙	頁行数
器財	文選 モンゼン	莊子ニ見ヘタリ也	119 ⑦	「俗書之異名也」 ニ——ト名ク。委ク莊子ニ見タリ也」	114 ③
草木	五色 ゴシキ	即莎草也 ニクミクサ	126 ⑦	「異名ヲ鬼髭ト曰フ也」	120 ⑦
草木	香附子 カウフシ	又云フ南天草ト本草ニ見タリ 亦南燭ト名ク 其ノ實赤シテ燭火ノ如シ 故ニ云フ尔爰ニ日本ノ俗云フハ南天竺ト何ソヤ哉 本草ニモ見エ不此ノ三字ハ只云ニ一字ト而已ノミ 愚推スルニ之ヲ天竺國ニ東西南北中ノ之五有リ 恐ハ世俗南天ノ二字ヲ云ント欲ス 語言順ニ下ツテ而連呼カ南天竺ト乎 本説ヲ檢可シ也	130 ③	「又曰フ——ハ草木ト本草ニ見ヘタリ。又異名南燭ト云。其ノ實赤シテ燭火ノ如シ。故ニ尔云フ。爰ニ日本之俗南天竺ト曰フ。何ソ哉。本草ニハ竺之字見ヘ不。只——ト云而已。愚之ヲ推イハルニ天竺ニ東西南北中之五ツ有リ。恐ラクハ世俗欲シテ——之ニ一字ヲ曰ハント言語順下而シテ連ニ——竺ト呼ブ歟。本説ノ義檢可キ也」	125 ②
草木	南天 ナンテン				

部門	漢字	元和三年版注文語彙	頁行数	春林本注文語彙	頁行数
器財	仙花 ^{センクワ}			注文ナシ	95 ②
器財	筆海 ^{ヒツカイ}			注文ナシ	115 ①
器財	寶虵 ^{ホウシヤ}			注文ナシ	115 ③

これら春良本が「異名」と記載されているのに対し、元和三年版の方が「異名」未記載であるものを眺めてみた。すると、気形門の「麝香^{ジヤカウ}」注文語彙「小鳥ノ名也」、「黄耳^{クワウニ}」の春良本注文語彙「俊犬ノ異名也」（元和三年版は、この部分の注文未記載）、飲食門の「緑醕^{リョクシヨ}」注文語彙「酒也」を「好酒之異名也」、「濁醪^{ダクラウ}」（元和三年版注文未記載）の注文語彙「悪酒之異名也」、「茆柴」の注文語彙「濁酒之異名也」（元和三年版は、この部分の注文「濁醪也」と別内容）、「浮蟻^{フキギ}」注文語彙「酒ノ名也」（他古写本類である亀田本にあつては「酒ノ異名也」と記載）を「悪酒之異名也」、「芳茗^{メイ}」の注文語彙「好茶也」を「好茶ノ異名」、器財門の「庖丁」注文語彙「刀ノ名也」を「刀之異名」、草木門の「南天^{ナンテン}」注文語彙「亦名ク南燭^{ナンヨク}」を「又異名南燭^{ナンヨク}」がある。さらに、春良本を精査してみると、時節門「月」の語彙に「異名」の記載が見い出されるのである。この春良本における時節門の編纂形態が月毎を大見出しにしてその下に注文語彙同様の大ききで小見出しにした「花朝」などが記述されていて他の『下学集』とは顕著に異なることをここに付加しておく。そして「正月」の「隙」「大簇」「履端」「肇歳」「甫年」「睦月」「人日」語彙に限って「異名」記載が見えない。

四 古写本『下学集』における「異名」

『下学集』は数多くの写本が編まれている。先に対校した春良本を除くこれらの古写本と元和本とにおける記載語彙の異同について精査してみるとまだまだ解釈しきれない問題が残されている。この注文語彙の「異名」という記載もしかりである。そこで、前頁の表にのぼらなかつた古写本に見える「異名」記載の語彙を取り上げることとする。それは、飲食門に記載されている「雲脚」（茶の名）という語である。古写本間にあつて唯一確認できる異同の語彙である。これを各古写本類でみると、先ほどと同様に「異名」の「異」の字記載未記載で分かれてくる。言うまでもないが、元和本と春良本は未記載の方に位置する。

記載の古写本

- | | | |
|---------|--|-------------|
| 筑波大学蔵本 | 雲脚 ^{ウンキヤク} 悪茶ノ異名。言茶ノ泡早減。如ニ浮雲脚早過去一 | [飲食門 85 ④] |
| 春林本 | 雲脚 ^{ウンキヤク} 悪茶異名。言ハ茶ノ泡早 ^{アフ} 減 ^{ルコト} 。如キニ浮雲ノ脚ノ早 ^{スキ} 過去 ^{ルカ} 一也 | [飲食門 100 ①] |
| 文明十七年本 | 雲脚 悪茶ノ異名。言ハ茶ノ泡早減 ^{シテ} 。如シニ浮雲ノ脚ノ早過 ^キ 去 ^{ルカ} 一也 | [飲食門 25 ②] |
| 文明十一年本 | 雲脚 ^{ウンキヤク} 悪茶異名。言茶泡早減 ^{ルコト} 。(如ニ浮雲脚早過去一也) | [飲食門 70 欄外] |
| 榊原本 | 雲脚 悪茶ノ異名。言ハ茶ノ泡早 ^{アフ} 減 ^{コト} 。如ニ浮雲ノ脚ノ早 ^{スキ} 過去 ^{ルカ} 一也 | [飲食門 55 ③] |
| 陽明文庫本 | 雲脚 悪茶ノ異名。言ハ茶ノ泡早 ^{アフ} 減 ^{スルコト} 。如クニニ浮雲ノ脚ノ早 ^{スキ} 過去 ^去 也 | [飲食門 458 ③] |
| 天文二十三年本 | 雲脚 悪茶ノ異名。言ハ茶ノ泡早 ^{アフ} 減 ^{スルコト} 。如ニ浮雲ノ脚ノ早 ^{スキ} 過去 ^去 一也 | |
| 永祿二年本 | 雲脚 ^{ウンキヤク} 悪茶ノ異名也。言ハ茶ノ泡早 ^{アフ} 減 ^テ 。如ニ浮 ^一 ノ ^一 早 ^ク 過去 ^ル 之義也 | |

黒川本 雲脚ウシキヤク 茶異名也。言ハ茶ノ泡早アハク減キハテ。如ニ浮雲ノ脚ノ早ク過キ去ル一
静嘉堂本 雲脚ウシキヤク 悪茶ノ異名。言ハ茶ノ泡早アハク減ス。如ニ浮雲ノ脚ノ早過去也

未記載の古写本 亀田本 雲脚ウシキヤク 悪茶也。茶ノ泡早アハク減（キユルコト）。如浮雲ノ脚早ク過去ル也

元和三年版本 雲脚ウシキヤク 悪茶ノ名也。言ハ茶ノ泡早アハク減（キハ）。如ニ浮ウカ雲ノ脚ノ早ク過去カ一也

春良本 雲脚ウシキヤク 言云心ハ 茶之泡早アハク減ル事。如ニ浮雲之脚ノ早ク消ヘ去ル一也。故ニ云レ尔者歟

ここで、「異名」と記載するか否かという問題は、編者から転写者へと移行する。編者は上記古写本を見る限りでは「異名」と記述したものと伺われる。そして、未記載資料である亀田本の転写者は「悪茶也」と茶のひとつである「雲脚」の品質を示したにすぎない注文表現に改稿した。そこに解釈の相違が生まれたのである。これは元和本の「悪茶ノ名也」にも言える。単に「ノ名也」と表現するのと、明確に「ノ異名也」と表現するのでは対象認定の位置づけが違ってくるのではないか。「ノ名也」であれば、編者個人の主観的見解として「雲脚」といえばそれが単に「悪茶」の名称ですむ。これを「ノ異名也」とすることで当代の茶人社会の専門グループにあって、一般共通認定として悪品質の折紙をつけられたということを示唆するからである。この意味からいくと「異名」ということばの表現は、かなり客観性のある非情なことばの響きが進められているのではないかと考えさせられるのである。これを嫌ってか春良本は、意識的にこの注文を完全に抹消している。逆に三節の対校表で示したように春良本が増補している語も散見する（私はこれを春良本の無意識における脱文とみない）。こうした春良本『下学集』における注文内容の改定意識をこの「異名」の

部分だけで説明することは、はなはだ大雑把な取り組み方法となるであろうから、注文全体の詳細に渡る校合手続きをもつて今後このことについて言及していくことにもなるう。春良本については既に『日本古辞書を学ぶ人のために』(一九九五年・世界思想社刊)の第三章「主要辞書各説二十一 下学集」のなかで一部図版をもつて取り上げているので参照されたい。

五 『下学集』未記載の「異名」

「異名」という記載をすることについては、名称を単に「^レ之名也」、「其ノ名^レ曰」、「或ハ名^ク――ト」^トとするか、それとも「之異名也」「異名^ト」とするかで編纂者の記述意識そのものに大きな差異があると考えられる。

たとえば、「狐」などは私たち人間にとって何かと関心をよせる動物である。この「狐」には、きつといくつかの異名があるのであるのかと誰もが想像するであろう。しかし、何故か『下学集』編纂において、この「狐」の語彙注文における記載内容は、

クツネ【狐】多^ク疑^フ之獸也 古^ヘノ之姪婦也 其ノ名^ハ紫々^ト化^シ爲^レ狐^ト也 氣形〔元和本63―1〕

キツネ【狐】多^ク疑^フ之獸也 古^ヘノ之姪婦也 其ノ名^ハ紫々^ト化^シ爲^レ狐^ト也 獸類〔春良本53―2〕

とあつて、千古の姪婦が「狐」となり、その名前を「紫々」と呼称した旨の中国古説を継承した記述がなされるにすぎない。この「紫々」なる呼称は文禄五年写の『河海抄』卷二(夕顔)へ角川書店刊・二四二下⑬の「いつれかきつね

なるらむな」の条に、

名山記^{メイ}曰狐^ハ先古^{センコノイソフ}之淫婦也。其名^ナ曰^ト紫化^{シヤクワ}而^ニ為^ル婦^ト故^ニ名^ヲ自^ラ稱^ス阿紫^{アシ}」

とあり、ここでいう「名山記」なる書籍が典拠であることが知れる。ただし、『下学集』では「紫々」であるのに対し、「紫化」と呼称する点で異なり、さらには化して婦人となり、名前を「阿紫」という記述があるのに、『下学集』の編者東麓破衲はこれを記載しなかつたことからして、『河海称』の引用するところの『名山記』とは異なる写本をもつて採録がなされたのではないかと推察するに留る。この『名山記』の記載する「紫化」なる語については、現在のところ、諸橋の『大漢和辞典』（大修館刊）にあつても未記載であり、「紫々」は、「怪しげなさまを形容する語。〔剪燈餘話、胡眉娘傳〕綏綏厥状、紫紫其名、過可^レ文乎」と記述されるだけで当該の意は見えない。唯一「野狐」を「紫狐」と異称することが『酉陽雜俎』諾犀記下に「舊説、野狐名^ニ紫狐^一、夜撃^レ尾火出、將^レ爲^レ恠、必戴^ニ鬪髀^一拜^ニ北斗^一、鬪髀不^レ墜、則化爲^レ人矣」と引用されていて「狐」に関わる呼称なのである。いずれにしても「狐」を呼称する語で「紫」を冠すること自体、何なのかで認知するにはまだ問題が残る語であることは確かである。

ところで、「野干」は、残念ながら『下学集』においては和語読みの「こぎつね」はあつても注文語彙を有しないし、『埴囊鈔』にあつても未記載事項であるために判別できないのが現実である。しかし、鑑みるに、狐に類似する生き物で、好んで樹木に登る性質を有するという『搜神記』の記述内容を踏まえた編者の選別考察であつたのかと推察もできよう。この点において『下学集』は、確固たる語の認定判断がなされていて、学習者の拠り所とするに足るものとして賞揚されるものがある。『下学集』におけるこうした類似する語の記述排列にはよくよく注意せねばなるまい。これに対し、『日葡辞書』は、「野干」の頁を見ると、「Qitcune (狐) に同じ。」とある。このことは、別種区別の認定意

識を知ってか知らぬかはわからないのだが、同じ生き物であると編者は認定判断して記載していることになる。この意識の差異がまさに本論における「類義語」に留まるか、はたまた「異名」の語と呼称するに足るかを明察する指針として役立つのではなからうかと考えるのである。

そこで、古文献資料からこの「狐」と「野干」の呼称をさらに展望してみることにしたい。

和名抄 「狐ハ考声切韻ニ云ク。狐〔割註〕音胡、和名木豆禰。」ヤカン 獸ノ名。射干也。関中呼テ為スニ野干ト。語ノ訛也。

新猿樂記 「まよはし鳥」

「伊賀專」イガクウメ（「專」クウメ）和名抄に「和名太宇女、老女の二称」

河海抄 「刀女〔たうめ〕」

名語記 「問 ケタモノ、キツネ如何 答狐也 色ノ黄ナレハ黄恒歟 又黄經トモカケル歟 コノ色ハ子細アル事也
〈中略〉 先生ノ戒品ノチカラニヨリテ野干ノ身ヲハウル也ト聖教ニハトカレタリトキコユ」

『和名抄』『名語記』は「狐」と「野干」とを同類の語としての編述であることが知れる。

さらにまた、『下学集』は、「猫・韓獹・黄耳・猿猴・獼猴・栗鼠・呼子鳥・猶豫・土豹・鼬・狼」の後に「野干」と別種扱いの見出し語にして「野干ヤカン／コキツネ」を記載するのである。ここでいう「紫々」と別枠記載の「野干」が通常であれば「狐」の類義語として、そして異名として呼ばれるのであろうが、これを「異名」とせずに編述したところに、『下学集』編纂者及び当代の語認定の規範意識があるのではないかと考えてみたのである。

というのも、『下学集』編纂の文安元年（一四四四年）から二年後の文安三年（一四四六年）に觀勝寺の行譽の撰述になる『嗑囊鈔』があり、この記述内容がかなり『下学集』の注文語彙に近似して等しいからにはかならない。たとえば、ここに挙げた気形門の語である「猫」「韓獺」や「黄耳」の注文をもつて判断してみてもらいたい。

ネコ 【猫】鼻常冷ツメタシ。夏至ケシ一暖アタ、カナリ。旦暮アシタクレ目晴圓ハレマロシ。午ホソウノ時細シテ如イトスチ線ノ。

毛ノ色似トラ虎ニ。故ニ呼テ世俗ニ曰ヘ於ヲ菟ト。則喜フ矣。

氣形〔元和本63①〕

ネコ 【猫】鼻常冷ニシテ。夏至テ一日暖ナリ。日暮ニ目晴レテ圓ク。午ノ之時細而如レ線ノ。

毛似リ虎ニ。故ニ世俗呼曰フ於ニ菟ト。則喜フ矣。顔色好シトム。

獸類〔春良本53③〕

○虎ヲ。於菟ト云也。然ニ猫ノ姿。并ニ毛ノ色似ル虎ニ故ニ。世俗猫ヲ呼テ於ヲ菟ト云ヘバ。猫則喜ト云リ。〔中略〕猫ハ鼻常冷ツメタシ。夏至ノ日。一日ハ暖カ也。惣ヘテ旦暮ト暮ト。目晴圓マルシ。午ノ時ハ。細クシテ如レ線ト云リ。

〔嗑囊鈔卷第五53〕

カンロ 【韓獺】俊犬シユンナリ也。韓氏カンカ之カ獺イヌナリ也。

氣形〔元和本63②〕

カンロ 【韓獺】俊犬也。韓氏之獺也。

獸類〔春良本53③〕

○又曰韓獺カンロノ。イヌノ噬カシ於ニ縑ニ未トト云々。韓獺ハ。韓武ノ。俊犬也。〔嗑囊鈔卷第五50〕

クワウニ 【黄耳】晋陸機ノ犬ヲ名ニ黄耳ト。此ノ犬常ニ爲ス書ノ使ラ也。

氣形〔元和本63③〕

クワウジ【黄耳】俊犬之異名也。晋之陸機之犬、名——ト。此犬常ニ爲スルニ書ノ使者ラ一也 獸類「春良本53⑤」

○又犬ヲ黄耳共曰。晋ノ陸機カ犬ノ名也。此黄耳。常ニ書ノ使ヲシケルトナン。定テ耳ノ黄ナリニケルニヤ。

〔塏囊鈔卷第五50〕

これ以外にも、両書の共通する部分をいくつか見いだすことができるので抜粋しておく。

クワカ【果下】小馬ノ之異名也 其ノ馬長サ三尺乗之ニ可過果子ノ之低枝ノ之下ラ也

故ニ曰フ果下ト 宋人荆公カ句ニ云ク呼テ童ヲ羈「ホタサシム」我カ果下ノ驢「リ」ヲ云々

氣形「元和本62②」

クワカ【果下】小馬之異名也 其ノ長ニ尺 乗テハレ之ニ可過ニ果子低枝之下ラ一也

故ニ曰フ——ト 宋人荆公カ句ニ云呼テ童ヲ羈ニ我——驢ヲ云

獸類「春良本52②」

○果下トハ。小馬ノ異名也。其ノ長ケ三尺也。仍テ是ニ乗テハ。果下低枝ノ下ヲモ過「ツベシ」。故ニ果下ト云ト

云々。爰ヲ以テ宋人荆公カ句ニ云。呼テ童ヲ羈ニ我カ果下ノ驢「リウ」ト作レリ。〔塏囊鈔卷第七8〕

タウリン【桃林】牛ノ異名也 尚書ニ云ク放ッ牛ヲ桃林ノ野ニ

氣形「元和本62③」

タウリン【桃林】牛之異名也 尚書云 放ニ牛於——之野ニ

獸類「春良本52③」

○桃林ハ。只牛ノ異名也。尚書ニ云。放ッニ牛ヲ於桃林ノ埜ト。仍テ云尔也。埜ハ移者反。野也トテ。野ト同字也。

埜ハ野ノ字ノ古文ト云リ。〔塏囊鈔卷第七9〕

ケンリツ【歪粟】子牛ノ異名也 言其ノ牛ノ角如歪粟

氣形 [元和本 62 ④]

チンリツ【歪粟】小牛之異名也 詞其ノ角如——也

獸類 [春良本 52 ④]

○蟹立〔ケンリツ〕共云。〔埴囊鈔卷第七 9〕

コクボタン【黒牡丹】牛ノ異名也 唐人劉訓京師ニ春遊スルニ觀テ牡丹ヲ訓後ニ迎ヘテ客ヲ賞ス花ヲ

乃繫テ水牛ヲ在テ前ニ指シテ曰ク此劉訓カ之黒牡丹也

氣形 [元和本 62 ④]

コクボタン【黒牡丹】牛之異名也 唐人劉訓京師ニ春遊觀レ牡丹ヲ 訓後ニ迎テ客ヲ賞ス花ヲ

乃繫テ水牛ヲ在テ前ニ指シテ曰ク此則劉訓カ之曰フ——ト一故事也

獸類 [春良本 52 ④]

○黒牡丹共云。黒牡丹ト云事ハ。唐ノ劉訓京師ヲ遊覽スルニ。見ニ牡丹ヲ。仍テ後ニ劉訓迎テ客ヲ此花ヲ賞スル。乃

繫^{ツナ}イテ水牛^{ツナ}ヲ在^{ツナ}レ前^{ツナ}ニ故ニ。指レ之劉訓ガ黒牡丹也ト云ヘリ。爰ヲ以テ云レルト云々。〔埴囊鈔卷第七 9〕

ツ、ジノハナ【躑躅花】本草ニ云ク羊^{ヒツジクラヘバ}食ニ此ノ花^{テキチヨク}一躑躅^{カブル}トシテ而斃^{カブル}矣 故ニ云フニ躑躅花ト一

テキチヨク 日本ノ俗説ニ云ク羊ノ性至孝^{カウ}ナリ也 見テ此ノ花^{ツボシ}一蒼^{ツボシ}テ而赤キヲ以テ爲スニ

母乳ト一 躑躅トシテ折^{ヒザ}レ膝^{ヒザ}ヲ而欲スニ飲^{ノム}ントレ之^ラ 故ニ謂フニ躑躅花ト云

々 愚^グ未^グスニレ知^ラ於此ノ本説^ラ一可^シニ檢得^レ之^ラ一也

草木 [元和本 133 ②]

ツ、ジノハナ【躑躅花】即——ハ本草ニ云羊食^フレ此花^ヲ——ト而斃^{カブル}死ス 故曰フ——ト也

テキチヨク 日本之俗説ニ曰ク羊ノ性至孝也 見テ此ノ花^{ツボシ}一蒼^{ツボシ}テ而赤キヲ一以テ爲シテニ

母ノ乳房チフサ——ト而シテ折ヒサ膝ヒサ而テ欲飲ノムレ之ヲ 故ニ曰クフニ——花ト也

愚予等グヨハ未サレ知ラ此ノ本説ヲ也

草木「春良本129②」

○此問。實ニ然リ本名ハ。山榴リウ也。其花赤シテ。柘榴リウニ似タル也。是ヲ躑躅ツクジト云事ハ。古事ニ依テ也。申サハ異名ナルヘシ。千金翼方ト云。本草ニ云。羊シ食テ此花ヲ。躑躅ツクジシテ而斃ス。故ニ云レト。文選ニハ躑躅ト。タ、ズムトヨメリ。注ニハ不レ安ノ兒ト云。立煩タチワツラヒナヤム惱スカタ姿ナルヘシ。或ハフシマロフトヨム同心也。羊シ此ノ山榴リウノ花ヲ食テ。立煩ツブレンシヒテ斃ス死ケルヨリ。ツ、ジノ名トハスル也。或説ニ云。羊ノ性ハ至孝ナレハ。見テ此花ノ赤蒼ツボミ。母ノ乳ト思テ。躑躅ツクジシテ折ヒサ膝ヒサヲ飲ノムレ之。故ニ云レ共。此義難ニ信用シ。又本草ノ文ニ違ヘリ。但事廣ケレハ。何ナル文ノ説ニカ。陀羅尼集經ニ云。伽羅毘羅樹キヤラヒラジユ。唐ニハ云ニ躑躅ト云々。花赤キ故ニ。映エイニ山徑ヲ共云也。但順カ和名ニハ。山榴リウヲハ。アイツ、ジト點セリ。和名ニ云。羊躑躅イワツ、シニ 菌竿イムセン 山榴アイツ、シ 子以山石榴ヲ也花ニ 羊ノ躑躅ヲ相ト云云「璫囊鈔卷第六」

このように、『下学集』と『璫囊鈔』という同時代に位置する古辞書は注文語彙から眺めると編纂過程状況にあつて深い繋がりをも有するものであることがご理解いただけたかと思うのである。このことは、山田俊雄著『日本語と辞書』（中公新書・昭和五十三年刊）が「近世の辞書」中でこの二書を比較した後に、「これらの差は、辞書編集者の配慮安排から出るものであつて、これらのどの項目一つをとつてみても、当代においては恐らく、編者の独自の発見や提唱・異見ではなくて、知識階層の一般常識であつたはずである。」（一四七頁）と位置付けられた点はまさに卓見であつた。がしかし、山田氏が提示した資料は「四季ノ異名」といった限定された一部分をもつての見解であり、二書を詳細

に對校分析した上での見解ではなかつたかということに注意されたい。そういう私自身も今ここでこの二書を全面検討するわけでないのだが、右の比較對校した語文例からみても、これが単に「当代知識階層の一般常識」とかたづけられないのではないかと考へるのである。すなわち、共通する語の理解にとどまらず、注釈文までも共通理解情報として、同時代の異なる場所異なる編纂者がここまで速やかに同じく表現できるものであつたのだろうかといった新たな疑問が生じてくるからである。私自身、この当代相互の古辞書の関わりについては、近い将来さらに精査した資料を對校提示したかたちで、この問題について論及していく氣構えでいるのでここでは疑問提唱の段階に留めておくことにする。さらに視點を変えて、『搥囊鈔』の方で「異名」と表現される語に對して、先行する『下学集』の方で果たしていかなる収載認定しているかを検証することにする。

たとえば、卷第七十「傍若無人と云ハ。何事ソ」の、

○狎ナレ人ノテイ躰也。傍若無人ヲバ。カタハラニ人ナキガゴトシトヨム也。喩へバ又人モ無キ様ニ自由也ト云詞也。其義

ハ同シケレ共。古事ニ又異説有。或ハ晋ノ桓温ハ貴者也シガ。逢王猛ニ而談三世上ノ事ヲ。然ニ王猛捫モン虱シテ而語

ル。是ヲ傍若無レ人云ケル也。又史記ニ曰。荆軻ト與ト高漸離ニ歌タヒ市ニ已テ而相。泣傍若無カ人ト云。此ハ燕

ノ太子丹カ。奏始皇ヲ討ントテ遣ハシ、者共也。又捫ハ莫昆ノ反。持也ト尺セリ。ケニモ虱ヲ拾テ手ニ持テ。貴人

ニ向テ語ランハ見惡カルベシ。虱ノ字ハ風ノ片方ナレバ。シラミヲ半風ト云異名有。古人ノ句ニ云ク。窓前ニ捏ヒネル

半風フム。

とある説明だが、これは『下学集』中の

バウシヤクブジン【傍若無人】晋ノ桓温貴者ノ也 逢テ王猛ニ而談當世ノ事ヲ猛

捫ヒネツテ虱シツヲ語ル而ルヲ傍若無人ト云也。

言辭 [元和本 152 ⑦]

パウジヤクブジン【傍若無人】晋之桓温貴者ノ也。逢レテ王マウ一猛マウニ而談シレズ于ニ當世之事ヲ王猛

捫ヒネツレテ虱シツヲ語フト云フ也。云々。

言辭 [春良本 154 ⑤]

シラミ／シツ【虱】食人ヲ虫 異名ヲ半風トイフ 句ニ云ク窓前ニ捏ヒネル半風ヲ。

氣形 [元和本 67 ②]

シラミ／シツ【虱】食人ヲ虫也。異名ヲ曰フ半風ト也。古句云ク月隱窓前ニ捏ヒネル半風ヲ

獸類 [春良本 55 ⑤]

といったこの二カ所の語と先行する古辞書『塵袋』の「傍若無人ト云フハ今案欵。所見アル欵」の

○史記ニ曰ク。荆軻クイカト與ト高漸離カウセンリ一歌ヒ於レ市ニ已テ而相泣ラ傍ラ若無レ人ト云ヘリ。フルキコトハナリ。コレハ燕ノ太子丹タン。

奏ノ始皇ヲタハカリテウタントテコレヲツカヒニヤリシキトキノコトナリ。

の説明文をもとの見事に合体して編集した内容であることが判明する。

次に卷六22「恒娥コウガト云ハ。何スル事ソ」の語「恒娥」で、

○恒娥ハ。月ノ異名也。遊仙窟クツニ恒娥ノ月人女ナリ也ト讀メリ。實ニ八人ノ名也。恒娥ハ。羿ゲイカ妻也。作リテニ仙藥ヲ。以テ

欲レ服セントレ之ヲ。然ラ恒娥偷ニ服シテレ之。成テ仙人ト。奔テ入ルニ月中ニ云々。仍テ尔云也。羿ゲイハ有窮イウキウノ君也。篡ウハニ

夏后相カコウシヤウノ位ヲト云リ。昔ノ精兵ノ射手也キ。サレハ論語ニ曰ク羿善射ヨクユミルト云々。加レ之ス月ノ異名多侍リ。銀鈎ギンコウ。王

鈎。銀光。玉鏡。金魄。金波。菟影。兎月。桂輪。桂影。仙娥。陰精。虚弓。織ノ名也。蛾眉カビ 同上。破鏡。半月

也。〈下略〉

とある。しかし、この「恒娥」をはじめとして和語「左佐良拔壯子」「月讀男」「月弓男」「桂男」なる語を全く【下学集】そして『運歩色葉集』には未収載ということを知らねばなるまい。では『下学集』や『運歩色葉集』に「月」を表

現する語が全くないのかといえはそうではない。次に掲げる。

ギヨクト 【玉兔】月也。 天地〔元和本17④〕

キヨクト 【玉兔】月之名也。 天地〔春良本9③〕

(ギヨクト)ト【玉兔】月名。 〔元龜本運歩色葉集283④〕

といった具合に「玉兔」の語があり、これが逆に『瑤囊鈔』には未収載なのである。この天象の「月」という語が当代における共通認識語のなかにあつて何故こうもかけはなれているのかということが問題なのである。この両書に見える「姮娥」と「玉兔」とのそれぞれの語を共に収載され、共通認識の語としているのがこの後に編纂される易林本『節用集』などの『節用集』類に待たなければならぬことも事実である。だが、この問題を今は詳細にかつ明確に解明できないでいる。

また、卷第六28「老人之杖ヲ。鳩之杖ト云ハ何ノ謂レソ」の語「鳩杖」で、

○老人ノ杖ノ頭ニ。鳩ノ不_レ噎_ム鳥ノ形ヲ刻_キ事有。仍テ_レ云也。其ノ心ハ不_レ噎_セ義ヲ取ト云々。鳩ハ不_レ噎_セ鳥ナル故也。老人ハ必ス杖ヲツクヘケレハ。其ノ由アルヘキ歟。へ中略_ケ鳩杖ハ則老人ノ異名トス。但シ別シテ七十ノ異名ニ出セリ。致仕。懸車。從心等同_ク七十ノ名也。へ下略_ケ

と「鳩杖」の語を「老人」ノ異名と認定し、これをさらに「別シテ七十ノ異名」とし、類義語数例を収載する。この典拠となる『孝経』や『論語』といった内容文をも註記載するといった、いかにも専門知識者の利用を目的とした編纂形態をめざしている。これに対し、『下学集』器材〔元和本113②・春良本105④〕にあつては、

ハトノツエ【鳩杖】老人ノ杖ノ頭刻_キ鳩ノ形ヲ。取_ル其ノ不_レ噎_セ之ノ義也。鳩ハ不_レ噎_セ之ノ鳥也

ハトノツエ【鳩杖】老人之杖ノ頭刻ム鳩之形ヲ取ル其不噎之義一 芭鳩ハ云フ不噎鳥ト故象レ之ヲ曰也
といとも簡潔に「鳩杖」を説明するところにとどまるのである。また「七十ノ名」を表す類義語である「致仕」「懸車」「従心」等（『運歩色葉集』も未収載）のいわば応用知識とでもいう特殊な漢語については編集対象語から外してあるということになる。このことが、『下学集』編纂と『壺囊鈔』編纂における主要目的の異なる点と言える。言い換えれば、異名を含む類義語を多く記述することは、知識の拡張意欲にほかならない。今昔を問わず人にとってことばを認識するその豊富さというものは、日々平常で生きる心の充実安定にも関わるものであって、多種多様な語とその意義内容について広く深く修得する喜びを味わうことになる。経典などの文句などからその真理を修得するのは多少違ふのだが、その周囲に広がることばの修得をもって心の拠り所を求めようと意識し動き始めた時、当代ことばの入門手引書が編まれ、これがこの分類仕立ての辞書『下学集』であれば、これを学ばずとも既にこのレベル領域に充足した者を対象にした応用専門書類が『壺囊鈔』となるのではということが、この「異名」の語注文を見据えていて考えさせられるのである。これほどまでに借用し複写するがまでの共通注文の記述方法内容は、知識の二段構えの構成とはいえないだろうか。時を後にするいろは引きの『運歩色葉集』にあっては、「鳩杖」の語は収載するものの『下学集』ほどの注文すら必要としていない。とはいえ、その編纂対応意識は、時を待たずして一人の手により実行されていることに驚愕を禁じえないのも事実である。

六 その他の古辞書と「異名」記載

古辞書中に「異名」ということばがいつごろから収載され、いかなる語種語彙に「異名」と注記されているのを未だ

分析していない。ここでは、この点に着目して見ることにしたい。

『運歩色葉集』（天正十七年本・静嘉堂文庫本参照）

まず、同時代編纂の古辞書『運歩色葉集』にあつては、イ部の21番目に「異名」という語が収載され、さらに「夷則」の語に「七月之異名也」と注記されるのである。他の語については、先述した「聖徳太子」（『下学集』と共通の語注文内容）が拾えるぐらいで、ほとんど「異名」という語を見ないことからどのように注記表現しているのかといえ、『下学集』にも見えた「□□名」「□□之名」「□□之名也」「唐名□□」「□□唐名」「□□之唐名」等と注記される語がこれに類似するものかということである。次にそれらの語をイからトの部門に見える語に限って整理したものを列挙しておく。

□□名……………ハククラウ博勞 馬商人名・下。ハククラク伯樂 ツカサト典ル天馬ラ星之名。ハツボク八木 米名。八人ニン 火名。

ニワヒ庭火 神樂名。

ホウシヤウ鳳城 京名。鳳味チウ 硯名。

アシ平安城 京名。戸ヘイ 牧名。

□□内名……………ホウシ鋒矢 諸葛八陣内名。方圓エン 諸葛八陣ノ内名。

□□之名……………ロク漉酌 酒家之仕丁之名。

ハトウ拔頭 樂之名。

□□之名也……馬蹄テイ 硯之名也(下略)。

女御更衣ニョウゴカウイ 任人之名也。

北闕ケツ 禁裏之名也。

□□ノ名也……北邦パウ 三昧ノ名也。

唐名□□……市令正イチノカミ 唐名市令。

漏刻博士ロウコクハクシ 唐名挈壺ケツコ。

判事シ 唐名理正。隼人ハヤト 唐名布護ホコ。

□□唐名……馬都尉ハトイ 左右馬允・唐名。

別當タウ 藏人頭ラウ云・唐名大事。

□□之唐名……博陸ハクロク 関白之唐名。佩劍ハイケン 帶刀之唐名タテワキカラナ。

布護ホコ 隼人之唐名。

兵部ヘイホウ 兵部之唐名。別駕ヘツカ 権介之唐名。唐陵少監ヘイレウセウカ。諸陵之頭之唐名。

都尉トイ 備馬允之唐名。都護トゴ 按察之唐名。

□□之御唐名……法王フワウ 親王之御唐名。

ここでは「唐名(からな)」という同義異語を表現する用語が多く使用され、この用語は春林本『下学集』、『運歩色葉集』そして、同時代に編纂される易林本『節用集』にもその使用が見られる。いわば当代の別名を記述するときの辞

書説明の用語でもある。また、四 古写本『下学集』における「異名」で前述した「ノ名也」と「ノ異名也」のことに
関わる語として、「□□名」「□□之名」「□□之名也」がこの『運歩色葉集』にも散見する。

『名語記』（昭和五十八年、北野 克写、勉誠社刊参照）

文永五（一二六八）年成立（卷一―卷六）の六帖、建治元（一二七五）年成立の十帖、著者経尊の語源辞書『名語
記』にあつて「異名」の語は収載している。これも列挙しておこう。

- 門 クモトイヘル虫 サ、カニトイウ異名モアリ〔卷ニ2ウ〕
- 次 へ上略 我ハ煩惱ノ異名 我慢ノ我也〔卷ニ24ウ〕
- 答 へ上略 八キハ萩也シカノナクコロ同時ニ花サケル故ニ鹿鳴草トイヘル異名アリ〔卷ニ10才〕
- 次 へ上略 ヤマトハ吾朝ノ異名也〔卷四2ウ〕
- 答 へ上略 茶坑トイヘルモカハラケノ異名歟〔卷四5才〕
- 答 ヨキハ斧ノ異名歟〔卷四44才〕
- 答 タトハ田堵トカケリ 民ノ異名也〔卷四48ウ〕
- 次 鶴トイヘル鳥ヲ異名ニタツ如何 タカツルノ反カタツトナル也〔卷四52才〕
- 次 へ上略 ツタハ修乞ノ異名也〔卷四75ウ〕
- 次 へ上略 ナラハカシハノ異名也 柏也〔卷四94ウ〕
- 答 へ上略 舞ニハ廻雪ノ異名アリ〔卷五50才〕

- 次 ヤツコ如何 奴婢也 従者ノ異名也〔卷八33ウ〕
- 次 トコナツ如何 瞿麦ノ異名也 常夏也〔卷九11ウ〕
- 次 カレイヒ如何 飽餉ノ異名也 枯飯也〔卷九20オ〕
- 次 へ上略▽タナバタハ織女ノ異名ナルヘシ 棚服歟 又ツマナカ機歟〔卷九25オ〕
- 次 ウタカタ如何 コレハ波ノ異名歟 ウクタマカタ也 浮玉形也〔卷九38オ〕
- 次 サ、カニ如何 コレハクモノ異名歟〔卷九61オ〕
- 次 ユフカホ如何 コレハヒサコノ異名也〔卷九64ウ〕
- 次 シノ、メ如何 コレハ暁ノ異名歟〔卷九71ウ〕
- 次 シキタへ如何 コレハ枕ノ異名歟〔卷九71ウ〕
- 次 蟬ノ異名ニヒクラシ如何 コレハユフヘニナケハヒクラシト云也〔卷九74オ〕
- 次 へ上略▽ソレ(男郎花)ニハオホトチトイフ異名アリト申セリ〔卷十9ウ〕
- 問 フチハカマ如何 答 蘭ヲイヘル異名也〔卷十25ウ〕
- 次 フカミクサ如何 コレハ牡丹ノ異名ト申セル歟〔卷十26オ〕
- 次 コ、ロスケ如何 コレハ寸白ノ異名也〔卷十27オ〕
- 次 ス、カフト如何 コレハ餅味曾水ノ異名也〔卷十35オ〕

このなかで、「歟」と著者経尊が表現した「しののめ」「うたかた」「しきたへ」「ささがに」「ふかみくさ」「よき」「茶碗」の七つの異名の語が氣になる。が何故これらの語を疑問視したのか、今知るてがかりを見いだせないでいる。

後日の検証に待たねばならない。

この『名語記』収載の異名語を後世（江戸時代寛政六年版）の『異名分類抄』に倣って分類確認しておく、

時節部（たなばた【七夕】 || 織女、しののめ【東雲】 || 暁）

地儀部（やまと【大和】 || 日本、うたかた【泡沫】 || 波）

人倫部（たと【田堵】 || 民、ツタ【頭陀】 || 修乞、やつこ【奴婢】 || 従者）（ガ【我】 || 煩惱、心すけ || 寸白）（め

ぐりゆき【廻雪】 || 舞）

器財衣食部（しきたへ【敷妙】 || 枕）（チャワン【茶碗】 || 土器、よき || 斧）

（かれいひ【枯飯】 || 飽餉、すずかぶと || 餅味曾水）

鳥部（たづ || 鶴、ひぐらし【鶉】 || 蟬）

虫部（ささがに【篠蟹】 || 蜘蛛）

草部（とこなつ【常夏】 || 瞿麦、ふちばかま【藤袴】 || 蘭）

（しかななくさ【鹿鳴草】 || 萩、ゆふがほ【夕顔】 || 瓢、男郎花 || 大椽、ふかみぐさ【鹿韭】 || 牡丹、）

木部（ならがしは【檜柏】 || 柏）

となつて、岡田希雄氏が「鎌倉期の語源辞書名語記十帖に就いて」のなかで著者「經尊が「歌道の人」「歌仙」で無く、歌道の嗜みに於いて餘り深く無い事を物語るものとみるべきであろう」（「二四四四頁」と指摘したうえで、「其の癖、引用書から云へば^{如く}萬葉集の名が最も多いのである。此の點も注意せねばならぬ。」（「一四四五頁」と論述されたことにこの「異名」という用語が少しく関わりがあると考えるものである。というのも、「うたかた（泡）」を「波」の

異名とするのは誤認定であるし、さらにまた、これ以前の古辞書記述には、まだ「異名」の用語が見いだせないこと(二巻本『世俗字類抄』の「タツ 鶴別名」動物上71ウに「別名」の用語が一例収載されている)。そして、歌学の道にあっては『八雲御抄』(文暦元(一二三四年)年)などがすでに編纂され、ここでは巻三枝葉部に「異名」の用語が位置付けられ使用されていることがあげられる。その点で『名語記』が当代の語源辞書であることから、歌の道に一步踏込んでこの歌学用語の一つであった「異名」の語を引用して前述列举した語の説明著述をなした取っ掛かりの書であったのかもしれない。すなわち、歌学書と古辞書とが最初に触れ合う時期がこのあたりにあったのではないかということである。ただ、歌学書にあっても「異名」と位置づけて説明する語はすべて同じく共通する語であるとは限らないことに注意されたい。歌学辞書である藤原清輔の『奥義抄』(天治元(一二二四年)年)や藤原範兼の『和歌童蒙抄』(久安元(一一四五)年)を経て、そして上覚の『和歌色葉』(建久九(一一九八)年成立)七の「通用名言者付所名」冒頭文に、

古き歌の中に物のことなる名あり。また其の志をいふに、別の詞づかひあり。難歌に出たるをば、會釈の次に申べし。其外の要をとるに、略して十の部あり。〔上・一四二頁〕

と、「ことなる名」すなわち、「異名」の部として十分類にして収載している。その他この後に、

「かくれぬとは上には草なんど茂り生たる沼をいふなり。又池の異名ともいへり。〔中24・一八四頁〕

「ゑぐとは芹の異名なり。〔中27・一八三頁〕

「草枕とはたびの異名なり。〔中30・一八四頁〕

「未通女と書きてをとめとよめり。をさなき女を用るればなり。中帖の異名の部にあり。〔中32・一八五頁〕

「この歌或物には女郎花の異名なりけりとかけり。心もえず。」〔中50・一九三頁〕

「本草和名兼名宛など云ふ文にこそは、よろづの物の異名形をあかしたるに、見えたる事もなし。」

〔下14・二二〇頁〕

「をみ衣は異名の中にいへり。」〔下28・二五〇頁〕

とわずかながらも表現されている。

七 まとめ

室町時代を代表する古辞書『下学集』を中心に「異名」という注文中における語について検証してみた。古辞書に「異名」という用語が収載されるようになり、それを実際に使用する当代におけることばの社会状況について把握できることになるまいかとこの「異名」という用語を論点に据えたのだが、まだこの取り組みは山の麓に足を踏み入れたに等しい。『下学集』や『槎囊抄』の当代編集者自身がこの用語を使用して説明する語は全体から見れば数例にすぎないのだが、この「異名」という特別なものとして付加価値のレッテルを貼る規範意識そのものに当代における専門文化人としての素養が見え隠れしているのではなからうか。単に「又□□名也」、「名也」とか「ノ名也」と表現することでない新しい文化意識が歌学書にみられるように漸く辞書の流れのなかでこの用語による解釈説明が胎動しはじめたのである。また、易林本『節用集』にあって見出し語「異名」の語は未収載であり、また注文にあっては、

時候 **林鐘** **六月異名**

リシヤウ

涼月 リヤウゲツ

七月異名

陽月 カミナツキ

十月異名。

日本世俗呼曰神无月

夾鐘 **一月異名**

カウシヤウ

〔十二カ月全部でないこの四カ月の異名。網かけは、下学集収載語だが異名と記述なし。ゴチックは、下学集未記載の語であることを示す。以下同じ〕

器材「鳳味」ホウチウ 硯之異名」**鵜眼**ウヰメ「鏡之異名」カカン 「分直不律筆毫翰」フデ 兔毫トガウ。兔穎トエイ。菅城公クワンシヤウ。鷄距ケイキョ。毛穎モウエイ。黒頭公コクトウ。
 象管ザウクワン。鼠尾ソビ。筆異名フデノ。「金鴨」キンアツ。香爐異名

〔下学集では「鳳味」は「鳳味」、「菅城公」は「管城子」とする〕

気形「果下」クワカ 小馬異名」コクボタン 黒牡丹 牛異名」センリヤウ 山梁 雉異名」キンモウ 金毛 獅子異名」

草木「銀杏」ギンアン 異名鴨脚葉。形如鴨脚アフキヤク「也」ビヤツクシ 白芥子 異名米囊花ベイナウ。一朮ヒヤクジユツ「清客」セイカク 梅異名」

食服「釣詩」ツルシラ 鈎ツリバリ 酒ノ異名又云掃愁ハラフウレハハキ「帚」

の二十三語があり、『下学集』に未記載の語が六語ほどある。その他として十幹異名、十二枝異名、十二時異名の二十四語の計五十七語が収載され、下学集の収載語数七十五語と比較してかなり減少しているという事実。これと正と負との「異名」を収載しようとする辞書編纂意識の傾斜状況が民衆の読む辞書へと変動していく過程において、どう処理され、どう記載されたかを見つめ直すことにもなったと確信する。また、正と負の「異名」を表わす語についても、現代語の辞書にあっても実際に「異名」という用語は見い出せるのであるからして、この用語に対する規範意識を検証確認することはやはり大事なことでないか。そうした引き継ぎ、継続のなかで『広辞苑』に九三語、『大辞林』に四〇〇語と編纂者のこの「異名」という用語に対する認定意識に多少の異なりがあつて数量的なばらつきが見受けられることも私にとっては興味を惹くのである。今後この点をふまえ、「異名」という用語が江戸時代の『異名分類抄』や近代の『大言海』、そして現代の『広辞苑』・『大辞林』に至る辞書編纂における時代の流れのなかで、どう認識され、どう用いられてきたのかを再考察することにした。